

「石国異安心御取札記」「書翰并石州言上書写・法中同志并同行歎願書写・驗恩 問答記・山縣今吉田村同取調書記外同行改心請書并冬夜独語」の翻刻（一）

小林 准 士*

本誌に翻刻するのは、「石国異安心御取札記」写本一冊と「書翰并石州言上書写・法中同志并同行歎願書写・驗恩問答記・山縣今吉田村同取調書記外同行改心請書并冬夜独語」写本一冊の前半である。いずれも筆者が古書店から購入した写本であり、このほかに関連する写本として「山縣一件取調筆記并歎願書」一冊、「山縣一件落着記」一冊を架蔵している。

これら写本四冊はいずれも観月という僧侶が作成したもので、四冊とも「釈観月」との署名が表紙に記されている。観月がどういう人物かについては今後調査するつもりである。

これら四冊の記録は、安政年間に石見国と安芸国山県郡で起こった異安心事件に関するもので、石見国迹摩郡上村願楽寺の雷震という人物が説いた教えや教化の在り方をめぐって、雷震に従う僧侶らと対立する僧侶らが争った内容や、取り調べについて書かれている。本願寺史料研究所が保管する西本願寺文書の「石見国諸記」や「安芸国諸記」にもこの事件に関連する記事が多く含まれていることを筆者は確認しており、幕末の当該地域で大きな問題となっていた事件であることが

窺える。分量の多い史料であるので、本誌に分載するかたちで翻刻していくことにしたい。なお事件の全体像解明については別稿を用意する所存である。

（凡例）

一、史料の翻刻に当たっては適宜読点（・）や並列（・）を加えた。
一、漢字の字体は、原則として常用漢字・人名用漢字の新字体を使用した。異体字についても原則として正字に改めた。また口述筆記独特の略字についても通常の字体に改めた。

一、変体仮名は現代仮名に改めた。

一、史料本文中の割注については（ ）で括り表記した。

一、誤字・脱字等については原文通り記載し、（○カ）、（○脱カ）、（ママ）と注記した。

一、抹消箇所は■、虫損等により判読難の文字は□□・「」など
でその状態を記し、右側に（ ）を付し（○カ）（判読難）などと注記した。

*鳥根大学法文学部社会文化学科

【史料翻刻】

(表紙)「

不賢道人

釈観月

石国異安心御取札記

(印)「申」

大森

御役所

未三月十五日

村々

原村

村々

当国宗意御安心惑乱ニ就 当御料内取調御教誡ノ為 御使僧教宗寺様

御差下ニ相成候、依而大森御役所江右之御趣意御届被成候処、御役

所致テ御受宜敷御料内一統へ御回達之写左ニ顕ニ置者也、御代官ハ加

藤余十郎様也、異安心惑乱ニ付御取調ノ為宜敷も先銘々仕合并御代官

之御仁心卜可謂者也、右者本書ニハナケレトモ拙僧愚意ヲ記置者也、

後人不可笑公恩不可忘云々

御役所回達写シ左ニ記

当支配所ニ罷在候西本願寺末寺共之内、宗意安心筋取違候もの有之、

自然与其末門徒共之内ニも同様右異逆之ものへ随令固執候族も有

之、追々致増長候趣相聞へ

御門主教導之御職分難被為立、且者

公儀御苦勞筋引発候様成行候而者被為恐入候儀ニ付、右心得違之も

の共改心之上宗意相守候様教誡為可有之、今般 使僧被差向、近々巡

寺有之筈ニ候条得其意、村々ニおいて沙汰有之次第、門徒共無遅滞罷

出教誡可受候、尤近来巡寺いたし候もの之内ニハ如何之儀も有之哉ニ

相聞へ候ニ付、先支配分及沙汰候趣も有之候得共、此度之儀者全前書

教誡之儀ニ付無籠略様寺院并ニ門徒共江可申達候、此廻状村名下令受

印、早々順達留村分可相返もの也、

右者安心惑乱ニ付安政六未年二月廿二日ニ広島へ 御使僧教宗寺様

御着、芸州者右惑乱取調□外殿様逝去ニ付 御門主様御代香御用卜

云々権律師法橋之御格式ニ而御出之由云々、又昨年御糺手残御糺明相

濟、三月七日ニ当国へ御入込、七日晚鰐淵高善寺御止宿、翼八日御立、

川本村光永寺御止宿、翼九日柏淵村(小原)浄土寺御着、夫ヨリ大森

御役所へ文通之由承り候畢云々、夫ヨリ右之次第御触達ニ罷成申事ニ

御座候、云々

奉歎願口上覚

先般本山御使僧御差向ニ付、真光寺・光西寺分願出候処御差支之向も

有之、御断ニ相成候由、乍恐御尤之御儀と奉敬承候、然ル処此度御差

向之義者当国之内宗意安心筋心得違之者有之由、近々随心之者も致繁

茂候趣 御門主達 御聴、深く 御悲歎被為在候事ニ而已ニ銀山御料

も巡寺相濟候所、火急言上之義有之由ニ而当月二日帰京も致候得共、

宗意安心之儀ニ候得者、当御領内之所も其俣ニテ御捨置ニも難相成と

恐察仕候、且一宗之寺院も出離之大事ニ候得者、蒙御化導度奉存候間、

乍恐御領内御引受ニ相成候様■奉願上候、若御引受無御座候時者寺

別御召登ニも可相成儀与恐察仕候、左候得者銘々共手許ニ於而者差支之廉も御座候得者、此段御憐愍之上分御慈悲之御沙汰ヲ以テ早々御引受相成候様御取成之程偏ニ奉願上候、以上

東組惣代井原村

安政六

満行寺

未五月九日

西組惣代矢原村

安樂寺

浜田原井村

真光寺

光西寺

寺社

御奉行所

四月晦日之芳札致拜見候、然者今般巡寺之義ニ付、去ル三月御趣意書を以テ申達置候通り、定而領分江御趣意之通り御申立有之候事と被存候、然所存外巡寺断之義ニ付甚以如何之事ニ被存候、今般巡寺之儀ハ御宗意筋御教導ニ付御差向之儀領内破損も有之候ニ付一公儀御調中故被相断候との訳御勸財向相懸ハリ候義ニ候へハ一応相聞候得共、御教導向而已之儀差支等之筋難相記、依之法中分申立、弥聞届無之候ハ、御取計をも可有之候間、早々御申入可有之候、尤銀山御料巡寺相濟、且火急伺之儀も有之候旁、一先上京致し候間否京都へ向御申出可有之候、尤定而両寺之内御召可有之事と存候間、調次第御上京可有之、此段御返報旁可申達如此ニ御座候、以上

五月二日

御使僧

教宗寺

浜田

真光寺殿

光西寺殿

御調記

安政五戊午七月廿三日不正義之長石州銀山料上ミ村願楽寺住雷震同国浜田領上ミ田所村蓮光寺隱居深朗兩人ヲ御召登シニテ、於御殿御用僧御直調席左ニ記ス、正義之方銀山料祖式村善正寺新慈雲得業同浜田領鱒淵村高善寺深涯得業御呼出ニ相成於御殿鶴ノ間鞘ニ右四ヶ寺同席ニテ御取調御尋問ノ席順如左、御用僧正面三人御着座見習二人中央横向善正寺ハ余間、高善寺ハ飛椽故判^マ下ル、願楽寺不正ノ科人ナレトモ余間故、高善寺同様、蓮光寺飛椽ナレハ又判数下ル、凶ニ顯ス、

幸^ハ願^ハ出^ハ御

蓮光寺

幸^ハ深^ハ影^ハ出^ハ御

願楽寺

幸^ハ深^ハ通^ハ出^ハ御

高善寺

見^ハ見^ハ

蓮光寺

幸^ハ願^ハ出^ハ御

願楽寺

幸^ハ深^ハ影^ハ出^ハ御

善正寺

幸^ハ深^ハ通^ハ出^ハ御

高善寺

〇 〇

妙順寺様仰渡サレ

願行寺義ハ此迄

度々御取調ヘモ有之候所、又々今日

御慈悲ヲ以テ 御糺シ

ニ相成候上ハ、心底無覆藏御答可申上、元ヨリ

大善知識様 御手許ニ於テノ事ナレハ偽リカザリ事ハ不相成事ニ非ス

ヤ、願楽寺平伏ス、

蓮光寺隠居深明

其方義ハ去冬広島表ニ於テ 御取糺相濟候処、又々当春已来今ニ在京

ノ義ニ付テ御尋ノ義有之候間、謹テ可言上申 蓮光寺平伏ス

善正寺

高善寺

其国願楽寺御召出ニ相成、御法義筋 御取糺被為在、即今日モ 御調

ヘ有之、就而ハ同国ノ事法義筋巨細見聞致し候マ、言上可致候事、依

テ今日モ 御取糺ニ相成候間夕謹テ拝聴イタスヘシ、

妙順寺様御尋 願楽寺義是迄度々御尋ニ付申上ノ次第二種深心ノ中信

機ノ処ニ決定ヲ不許、尚歌ニモ〇安心ヲセウト思ヘハ機アツカヒ機テ

安心ヲセヌカ他力ヨトアリ、是ヲ以テ見ルトキ当流ノ正意一生安心ヲ

不許唯浅間敷■ト思ヒ詰メルカ了解ナリト心得居ルヤ、

願楽寺云、私ノ心得ハ元ヨリ報土往生ノ真因ハ安心ヨリ外ニナキ

コトニテ助カラヌモノヲ助ケ玉フ仏勅ヲ信シテ安心スルカ御当流

ノ御正意ト奉存候、尤不得意ノ人ノ安心シタイト思フテ私情

ヲ離ル、コト不能モノニ対シテハ安心セント思フハイツマテモ自

力妄執ハ離レカタキ故、機ノ安心ヲ払ヒシコトモアル歟ト存スレ

トモ機ニ安心ヲ許サヌト申コトハ、決シテ御坐ナク、夫■二種深
心ノ御教意ハ相立ヌコトコトニナリマス奉存候

御尋ニ夫ハ言ヌケナリ、今ノ言ハニモ左様ニ致セシコトモアル歟不

束事ニテハ不相濟、已ニ今ノ哥ニモ上ノ句テ安心ヲ遮シ下句テ

安心ヲセヌカ他力ヨト云ヘハ、安心ハ法ノ方ニシテ機ノ安心ハ入ラヌ

ノカ他力宗意トスルニアラスヤ

乍恐其哥ハ問答ニシテ書タルモノナレハ、始末ヲヨク御熟見可被

下、安心ヲ許サヌト申事ニテハ御坐ナク候

御尋、夫ハ兎モ角モ此一首ノ上テ安心ヲセヌカ他力ヨテ安心ヲ許サヌ

コトハ明ニ見ヘテアル

教宗寺様云、汝ノ意ハ安心ヲ払フタハ自力ノ安心ヲ払フト云意ナラン、

自力他力ノ二途アレハ其自他ニ力ヲ分別シテ自力ノ安心ヲ払フト云コ

トニナレハ妨モアルマシ、併シコノ哥ノ上テハ安心ヲセウト思フハ機

アツカヒトイヘハ、他力ノ安心マテモ払フ事ニナリテ居ル、人アリテ

往生ノ大事安心カ出来マセヌト云トキニ、イヤ安心ヲセウト思ハ自力

機テハ安心ハイラヌモノトイヘハ、夫レテハ機辺ニ安心ヲ許サヌコト

ニ非スヤ、

妙順云、機テ安心ヲセヌカ他力ヨトイヘハ、裏ヲカヘセハ安心ヲスル

ハ自力ナリ、他力ト云ハ不安心不決定ナリトイハネハナラヌ也、

教宗云、学階迄モ被 仰付候身分ナレハ知ラヌ訳ニハ決テナキ筈不得

意ノ機執ヲ払ン為ニ斯申スモノ歟ナレトモ、此教導ニハ多く人ノ聞惑

ヒニ相成ナリ、

言上ニ云、不審ナルコトヲ申立重々奉恐入候

妙順師 去家ニ送りシ書状ノ中ニモ〇ワスレナヨ罪ノフカキト死ヌル

コト仏ケキラヒナ我心カナ、此歌ナトモ（去家トハ溝口正円寺坊守ノ
実母戸谷村井土屋ノ老室也）少モ相ワカラヌコト、其方カ云処ハ一生
安心ヲ許サス、只我身ハ浅間シキモノト思ヒツメヨト云コトニナル、
世ニ所謂信機語りト全ク類同シテ居

言上ニ乍恐夫ハ其詛ヲ申サネハ御不審御尤ニ奉存候、此老母八十
年已前夫ニ離レ幼子四人ツレテ後家トナリ、昼夜大家ノ世話トニ
貪着シテマシタ処、私ノ法縁ニ値マシテ法ニ入マシタ、其後申シ
マスニハ此マテハ罪ヲ罪トモシラス、近ヨル後生ヲ心ニカケス暮
シテ居マシタコトノ浅間シサニ浮世ノコトニ付兎角懈怠イタシ、
又御報謝モテキヌト兼テ申シテ居マシテ、或トキ私方ヘ少シノ送
リモノヲイタセシ故、受取旁々返事ノ端ニ今ノ哥ヲ書テ遣シ申セ
シコトテ御坐リマス

御尋云、懈怠カチナモノニ遣スナレハ弥々其懈怠ヲコラシメンコソス
ベキニ仏恩ヲ喜ヘトモ報謝ヲ營メトモ大悲ヲ仰ゲトモ不レ云トモハ何
故ゾヤ、是カ己ガ申ス慚愧ノコトノミナリ、又其人ニシテハ汝ヲハ知
識ノ如ク思ヒ、汝カ書送リシトモハ聖教ノ如ク尊崇スヘシ、汝モ亦彼
レラス、メント思ヒテ書送ルナルヘシ、若シシカラサレハ全ク無益ノ
コト■スル、其勸ルトハ引立ルコトニハ非スヤ、尔ルニ引立ニハ非ス
シテ只罪ノ深キコトヲ忘レナト云タ斗リ、甚以相分カラヌコト也

言上、行届カヌ私夫ニヨロシキコト奉存候所、御教誡ヲ蒙^{（虫）}レ
ハ恐入斗ニ御坐候

妙順云、彼此哥並ニ其方カ日頃ノ教導フリニ照シ合スルニ先慚愧歎喜^{（虫）}
□ニツテハ慚愧ヲス、メテ歎喜ヲ談セス、信機信法ノ二ツテハ信機ヲ
談シテ信法ニ及ハス、是ヲ以テ見レハ或ハ信機秘事、又ハ安心ヲ許サ

ス、教導等ト夫々ヨリ言上ニ相成ント符節ヲ合スルナリ、
教宗云、汝ノ意得ハ先ツ参詣ノ中ニハ正意ヲ得タモノモアルヘケレ
トモ、多クハ不得意ノ機ユヘニ此ヲクタクキテ正意ニモトツカシメント
思フコ、ロナラン、併シ御宗教ノ如ク御定判ヲ相守テ談スルトキハ何
レモ御慈悲ノ行届カヌコトハ決シテナキモノナリ、夫テ自身ノ新義ヲ
申談スルコト、甚以不届ナリ

妙順云、汝カ思フ処ハ不得意ノ機ヲ破センコトヲツトメトスルニ似タ
リ、尔ルニソノ破邪ノミニシテ顕正ナシ、破邪ハ顕正ヲ本ニスヘテ談
スヘキニアラス□^{（ヤカ）}尔ラサルトモハ何ソヤ、由テ三機ヲ以云ヘハ邪定聚
ノ機ヲ破シテ不定聚ニ至ラシメ而其正定ニ入ラシムルコトナキ教導ニ
陥ル故ニ衆人皆惑ヒライダクコトニ相成、

言上云、私不学短才ノ私ケ様ノコトヲ申立、御教誡ニアツカリ候
ヘハ誤リ入ル斗ニ御座候

妙順云、ナルホトアルヘシ、時ニ高祖蓮祖等ノ一時御方便ノ御化
導ハ格別ノコト、詩哥等ヲ自己ニ作り出シテ無上ノ大法ヲ伝ルト云コ
ト、実ニ恐アルコト也、尔ニ汝ハ道歌ニモアラス、狂哥ニモ非ス、自
ラニモ口チ合イト名テ野卑ノ所作ヲナシ人ニ伝ヘ、ソノ上ナラス、女
童ノウタヒハヤス恋哥ナドヲモヂリテ無上ノ法義ヲ沙汰イタシ、夫モ
タ、一首カニ首歎數多作^{（マ）}シ出、此モ願樂寺指授、是モ願樂寺ヨリ習
ヒ得シト諸人モテハヤシ、甚シキニ至テハ若キ者トモ寄集リ同音ニ
節ヲツケテ哥フト申スコト也、此度達^シ御聴テ居ルソヨ、甚以テ不埒
千万、大法護持ノ身分ニハアルマシキコトナリ、既ニ学林表ヘモ連々
仰セ出サレ候通り、法談ノ義ハ御定式モ有之、浅論卑言ヲ交ヘナト嚴^{（論考）}
キ御誡モアルニ非スヤ、諸人ノ耳ヲ驚ス段不届ノ至リナリ、夫モ難僧

等ノ諭ヲ引トモ合法ヲモ得致サスト申ス体ノモノナレハ、兎モ角モ汝ハ三官ノ列ニ加リ年老ト云、殊ニ学階マテ被仰付候身分ニ決シテアルマシキコト也、

教宗云、余人ケ様ノ事アルトキハ異見ヲモ加ヘ教導ヲモ致スヘキ身分ヲモテ却テ次第御法義御守護トハ申カタク（非カ）奉対 大善知識様■
エ恐入ル次第（非カ）ニスヤ

言上重々奉恐入候斗ニ御座候、此上ニハ心底相改申度 奉 存候
間、何卒御慈悲ノ御沙汰之程奉願上候ト平伏ス

兩寺云、心底相改ル心中ナラハ無此上事也、
御尋

蓮光寺隱居深朗

妙順云、其方義ハ去冬称名寺出役前ニ於テ御取札ニ相成、先非ヲ悔ヒ回心ノ一札並ニ御教諭御受書迄差上、夫々ニ御殿ニ納リ（非カ）御上覽ニ備ル、尔ルニ当春以来今ニ在京致（原）候ハ去年ノ御慈悲ノ御取札、其上且ツ教諭難有承度ト云所存ナリヤ、又ハ去年ノ御取札不足ニ思ヒ御手元ニ在テ再往御調ヘニアツカリ候テ無失ノモノトナリテ帰国ノ上其事披露イタシ度ト云所存ナリヤ、

言上ニ云、決シテ我慢ノ心中ハ御サナク、只今御教諭ニ預度ト存候ハカリニ御ササフラフ、

妙順云、尔ラハ願樂寺義モ心底相改、回心致候上ハ、追々御教諭モ可有之、其節（頭注）「筋歎」汝モ御教諭可仰付、併シ御教諭ハ御教諭今少シ□御調ヘニ預リ度トノ所存歎、無用捨イヘ、

言上云、（非カ）去年嶋田様御役所去年ノ御調ヘ不足ト申スコトニテハ御ザナク候ヘトモ、今少シ心中ニ陥ラザルコト御座候ヘハ此段御願ヒ申上度奉存候

兩寺同音云、夫テハ御教諭ト申スコトニハ非ス、取札ヲ願書致ス也、尔ニ何故ニ春已来今日迄モ歎願差上申哉、

言上云、春三月嶋田様御役所ヘ歎願差申候（上脱カ）

兩寺云、イヤ、決シテ其歎願差上テハ居ラス、只御教諭ノ願ヒ斗也、

深朗云、篤ト考テ言上可仕候

妙順云、称名寺出役所ノ取札ヲ不足ニオモハ、何故回心書キ及ヒ御受書ヲ差上タルヤ、只 御使僧ノ手元カキリニ非ス、恐多クモ

大善知識ノ御上覽ニ備テアリ、夫ヲ今更不足ナト申テハ大善知識ヲ欺キ奉ル段不届至極ナリ、

朗云、其段実ニ奉恐入候、尤モ只今ニテモ病氣ニ御坐候カ、其節

ハ大風邪ニテ至極難義仕居候所、御法義ノコト推テマカリ出被躊躇仕候、

教宗云、大ニ叱テ云、躊躇トハ何事ソヤ出席モ可成程ノ病氣、殊ニ大切ナル御法義節躊躇トハ御上ヲ偽リ候段恐入タル次第ナリ、汝ノ心底ケ様ノ心中トハ兼テ知テ居タ察シテ居タソヨ、不届千万ノモノナリ、
朗云、重々奉恐入候、

妙順云、汝カ心得ハ不正義ニモ非ルモノヲ不正義ニ落シタト申立書類ヲモ調ヘサセント申ス心ナラン、併シ 御殿ノ誓詞テモ自筆ノ不レ能モノハ代筆也、夫ニテモ事済シテ公義ニ納ル、又公義ニ於テモ御裁許等ノ受書モ皆上ヨリ認テ御出ナサレ候テ本人ハタ、判ヲスル斗リナリ、夫ニテモ私ノ書ヌモノ故ナト、跡ヨリ□定申上コトハ決シテ出来ヌコトナリ、

教宗云、此ハ容易ナラサルコト、出役前ハ 御門主様御手元同様ノコト、尔ルニ去年称名寺ノ調ヘ方不足ニ存スル故ニ当年（非カ）此ヲ願

ヒ又来年ニ至テ去年ノ御取糺心中ニ落ヌコトナト、出願仕ルト申事ニナリテハ甚以相濟ヌコトナリ、

妙順云、尤強テ御取糺ニ預リ度ト申所存ナラハ其端々ヲ改メ、歎願イタシテノ上ニハ、御慈悲ノ御沙汰モ可有之ナレトモ、併シ一度

大善知識様へ回心書類等ヲ差上シ事ナレハ、急度重キ次第モ可有之間、其段心得置テ篤ト勘考ノ上歎願可致事ナリ

言上云、重々奉恐入候、此上ハ心底相改申度奉存候間幾重モ御慈悲ノ御沙汰奉願上候、

妙順云、善正寺・高善寺、其方共国元御法儀筋ノ事、何々迄モ具サニ言上イタサネハ御殿へ対シ不相濟事也、併シ世ノ風評取ルニタラヌコトハ申テ益キナキコトニ似タリ、シカト見聞イタサル、事ニテモ巨細言上可申候

教宗云、護法大切ノ心ヨリハ何モ包ミ隠スヘキコトニ非ス、是等申立テ(虫損)イカ、ナト決シテ用捨ニ及ハス、御教導ノ行届カセラル、様ニ御扶助可申出コト肝要ナリ、

妙順云、願樂寺義其方心底相改ル上先非ヲ悔ヒ我情ヲ離レ正当ニ任セネハナラヌコト也、尚又善正寺・高善寺御一派ト云、殊ニ同国ノコトナレハ互ニ我情ヲ離レ如法ニ大法弘通イタシ、大善知識ノ御苦勞ヲ安シ奉ルヘキコトナリ、

教宗寺云、願樂寺義厚キ御慈悲ノ御取調ヘラ(難カ)□□奉感戴、少モ忿恨ノ心有テハ相濟ヌソヨ、蓮如上人モ人ノ前テ云ヒカタキ事ナレハ陰ニテモ申シテ心中ヲ改ルカ目出度コト、仰セラレシコトモアル、世間ノ事トハ違イ御法義ノコトナレハ何モ耻ニナルヘキ節(前カ)ニアラス

大善知識ノ御慈悲ノ御取糺ニ預リ心中相改ル上ハ、第一

自身ノ出離永劫ノ大仕合、別シテ大善知識江御忠孝奉申上コトナレハ、必ス意得違ヒ無之様慎ネハナラヌソヨ、

妙順云、願樂寺義先達テ已来ノ御取糺、尚今日ノ処ニテ汝カ意得違ノ廉々相分ル上ハ御尋ノ廉々御答申上タル筋、夫々書認、回心一札御上へ差上可申、尚追テ御慈悲ノ御沙汰モ可有之候間、左様ノ相得サ意得可申候、

午七月廿三日

右願樂寺弥回心任リ、同十月六日七日兩夜於惣会所ニ不殘御御備用僧不殘御出張ノ上ニテ是迄意得違廉々回心談被仰出、速ニ回心談仕候事(六日)晩談ニハ殘念ノ色ヲ含ム、七日晩談ニハ(虫損)ハリ(虫損)□□(虫損)右中筒賀願正寺誓詞上京ニ付慎聽、同村同行五六輩同様聽聞致ス、此書ハ上田村永田淨福寺ヨリ備用(備カ)慎寫畢、

(空白)

奉差上候口上覚

拙僧儀

一 不學無才ヲモ不顧教導仕候付而者打々笑談ヲ以テ人数ヲ集 御

殿之御法則ニ相背候段重々奉恐入斗ニ御座候、以後者 御使僧様御教誡之廉々急度相守リ可申候、別而異途之化風決して相不取用候様底意分相慎可申候、何卒御使僧様之御慈悲ヲ以御穩便之御沙汰被為成下候得者難有仕合奉存候、此段御聞濟ニ相成候様宜敷御取計之程偏ニ奉願上候、以上

石見国邑智郡銀山御料

安政六年 川本村

三月 日 正覚寺

義諦花押

御掛役

願林寺殿

明円寺殿

正安寺殿

光永寺殿

善正寺殿

此書附者本人正覚寺義諦拙(前之)ニ入魂故高見之伏谷村真藏坊ニテ六月上旬(前之)備、義諦公目落(前之)ニテ写畢又

(空白)

(次の四行、全体抹消)

異安心願楽寺蓮光寺御調記

于時安政五戊午七月廿三日、邪義長狹石州銀山上ミ村願楽寺住雷震(得)年八七十有余才、并同国浜田領上田村蓮光寺隱居深朗、右之兩人京都六條御殿へ御召登被成、於御殿

(空白)

乍恐以書附歎願奉差上候

私共先祖代々浄土真宗ニ御座候処、近來者寺院教導方正義不正義之ニ途御座候由ニ而、既ニ芸州并銀山御料江者 御本山今 御使僧御差向ニ相成、夫々御取札御座候処、当御領■へ者寺院不招合ニ御座候哉、御引受不被為成候由、当春ニ到候而者村中一統相待兼居候処、御本山之様子右之趣承り大ニ当惑仕候、元來芸州異安心モ根元者石見与承り候得者、定而當御領内ニ茂不正義之方者可有御座候、然者未夕不得意之者何れを聽聞仕候而可然哉、愚案ニ銘々難斗、依之御上様以御慈悲 御本山御使僧当村へ御差向ニ相成候様与明細御免被仰付被下候ハ、期之通り心得候様与明細ニ蒙御教諭、村中末々ニ迄迄安堵仕候、全体右之義御捨置被下候而者及後年以前三業異安心之通り御公儀様 御苦勞筋ニ茂相成而茂恐多候得者、幾重ニ茂 御上様以御仁恵 御許容被成下度、兼而御法儀聽聞仕候事者全御国恩之頭与承居候処、只今ニ而弥合点仕御国恩之程重々難有

奉感戴候、其段委細 御本山へ歎願仕候而・教諭ニ申候ハ、私共生涯之□与奉存候、此段乍恐 御聞届被為成下候様偏ニ奉歎■候、以上

安政 井原村同行

安政七年 惣代

申三月 源三郎印

米平 印

寺社

御役所

右之通り歎願仕候ヨリ浜田領へ 御巡寺也□ル出来申候、実ニ深志之法中無之故、右之願無之候為□中々御巡寺ニハ相成難申哉卜被存候、

右願人の者者日高元卓・野田雄右衛門・源三郎・米平四人也、為後年心得之愚毫を遺置者也、

万延式辛酉正月三日観月記

(空白)

今度異安心惑乱ニ附鱒淵高善公の十六問左ニ記

第一問

(空白)

乍恐奉歎願候口上覚

一当国御法儀御取締之為去春銀山御料江御使僧御巡寺ニ相成、御用濟ニ相成候所、当領者 御領主分御断ニ相成趣故歎敷奉存候、然ル所当。(頭注)「○夏」^ナ御領表も御序ニ而御立寄之向ニ而御聞濟ニ相成趣承罷有、然ルニ 御使僧様御下向無之ニ就、同志之者共相待兼居事ニ御座候得共、何之 御沙汰も無御座候、若来春ニ茂相成候而者 去春大森御役所分料内触達之中ニ茂 御門主様御教導之御聽分難被為相立、依之御使僧御差向ニ相成候故、末々迄御教諭^可蒙由ニ被達候程之事ニ御座候ニ御手延ニ相成候而ハ^{自カ}然対銀山料へ其聞も不宜敷哉と奉存候、尚又世評ニ者金錢之義分 御法儀ハ御大切ニ者不思召与申触ル、御大遠忌 御執行之御本意ニ茂不被為相叶杯与風聞仕候、誠尔奉驚入候、乍恐愚存奉申上候、如此世評仕候様相成候而者、御殿御大遠忌御取持も不被致様相成候、^別而 大善知識

様御教導へ妨とも相成申候哉も難斗事ニ御座候、何分当年中ニ御使僧様御下向被為成下度、偏ニ奉願上候、御殿御役所。(頭注)「前」をも不憚申上候茂実ニ出離之一大事ニ御座候故如此申上候段 御聞濟被下、御殿御慈悲ヲ以 御使僧早急ニ御差向被為成下、我々共御教諭被為成下候ハ、^以厚大之御厚恩与奉存候、以上、

石州邑智郡和田村

万延元年 善八郎印

丙申十一月日 同 代五郎印

万延元庚申年 同 同 ^(自カ)三三郎次印

十一月日 同 同 原村 栄次郎印

同 同 繁平印

同 同 和田村 兼崎宗平印

御本山

御役人中様

右之願書観月心配致申候草案八月と伏谷金淵之産都賀上の村高善寺弟子曇勇公同志故ニ互ニ相助成シテ相認申候也、

右願書ヲ鱒淵高善公芸州本地専教寺へ送り、十六日便^(船カ)ニテ差上申候、然ル所ニ拙僧御正忌ニ井原村満行寺へ行^ニ十一月晦日鱒淵下対迄かへり申処ニ鱒高の役僧唯然井原へ行トテ書状持タリ、見ルニ^観用様日高様ト有、^(然カ)云観様と夕亭御申合之上助カヘリトの伝言也、尔レトモ開符モ不能、打分レ帰鱒高へ立寄申候、主語テ云、御使僧御入ト云々、

拙者ハ難有シ、何時何処ヘト尋申候、主云、廿五日御着、天河内満行寺へ貴僧參詣如何、明日御用聞申ト云々、拙カヘリ、十二月三日発足、祖式善正寺迄行、寮ニ宿シ、翌四日未明発足、天河内四上剋着、祖善ニハ天河内道中ニテ偶鱒高ノ伝言ヲ述ヘソレヨリ中嶋屋ト云ニ旅宿シ、御使僧様□ス、御使僧ハ妙順寺様、侍ハ林兵右衛門、下部一人以上三人ト云々、内意言上ス云々、御使僧云、御用之儀ハ五日御開座也、五日六日満行、八日上願、十日稲村浄土寺、十二十三沢浄土寺、十五日祖善、十七八九三日ハ福田願林寺ニテ御用済、廿日浜ニ移リ申積トの御咄云々、尔ル処翌五日日中御法談破邪顯正ニテ誠ニ難有御法談相終、引続御八御法談中半ニテ中風ノ大病差起、御声極微細ニテ言■舌分不申候、夫ヨリ□御文章御拝読不能、御下高坐林ヲ扣ヒ玉フ、来ル林ト福願ト兩人ニテ御扶助申御時一処ニ移リ玉フ、誠ニ心外残念骨髓ニ通ルホトのコトニ御座候、

(丁)

(表紙)

釈観月

書翰并石州言上書写

法中同志并同行歎願書写 驗恩問答記 (印)「申」

山縣今吉田村同取調書記外同行改心請書并冬夜独語」

高善石州異法一途ノ御沙汰ニアツカリ席（坐）□慨嘆常ナレトモ同志人ノ之ヲ且ツ上来ノ場ニ至ラス故ニ密ニ同志ノ人ヲ求ムルニ先浜田両寺及国分金藏有福光現等ニ書状ヲ呈スルニ、ソノ返答アルコトナシ、是以在京芸悲願寺へ細書ヲ呈スへ先ニ正月廿三日祖善ノ上東アリ、中ニ御目〔附西蓮寺ノ言上アリ〕悲願寺護法ノ志堅言ナク欺誑ナク、専ラ更事ヲ以御役方へ密ニ言上ス、是以異法退治ノ張本ヲナシ三僧御召ノ礎基ヲナス、而シテ御目附西蓮寺及高善寺其外十余人ノ同志、専ラ異法対治ノ志願ヲナシテ終ニ上書シケル、

石州同志委如最来 三僧トハ安政五年五月十四日出立、祖式善正寺同廿日京着、同年六月四日出立鱒淵高善寺隨身、阿須那西蓮寺へ御目附代へ同弟凝然公同十六日京着、同年七月 日出立、八月八日京着ノ大家明円寺

高善寺御召状、四月朔日御認■嶋田左兵衛権大尉殿へ五月朔日天河内満行寺ヨリ態飛ニテ到来、同寺添書略之、

同寺先院之御兄心樹院証驗兄ヨリ同時書状如左

以御面墨得御意候、益御安康御法護可成奉賀候、小子儀無異儀致消日候条乍恐御安心可被下候、然者近来上願一条定而御心配可被成、一昨日善正寺参り同人分貴寺様之様子モ承り歎喜不斜奉存候、何分此度之一条不捨置御心配可被成奉祈入候、上願之於宅野玉泉寺同龍善寺隠居

福光瑞光寺吉浦教願寺井田村龍藏寺小浜安樂寺、此人數者同腹之人二而御座候間、此条御承知置可被成、拙寺モ從來上願一条ニ付而者腹内断力如ク存候得共、時不到候ニ付見合居候所、此度惑乱致し時ナル哉〱と喜申候、夫ニ付教導真儀弁ト名ケ付十科ヲ設認カケ申候、今卅丁斗認申候、入御覽ニ申度候、何共余リ火急故草稿之成ニ而不任心底候段残念ニ奉存候、十科ト申候者別紙申上候通り御座候間、若相調ひ候ハ、御覽被下度、今般各々方御召御上京被成候趣、誠ニ〱御苦勞千万ニ奉存候、何分万事宜敷御斗可被成候、何れ各人数丈ケハ法談法話御差留ニ不相成してハ、当国之風儀者相改り申間敷奉存候、慶円房殿儀者兼而委細承知被致候間、御相談可被成候、尤当年者筑前被罷越候■様子ニ承候間、万一留主可相成も難斗、何卒〱一■大事之事ニ候得者護法安ニ奉断候、右心地申上度如此ニ御座候、恐々、

四 心樹院

四月廿九日 証驗九拜

高善寺宗源大徳

(空白)

安政五年御法儀惑乱ニ付、大家明円寺御召登之事故、川本組法中之内両三ヶ寺今明円寺江送り被申候書状写

御頼申口上覚

一 今般貴寺徒 御殿御召登之由御苦勞ニ奉存候、右御用之趣先達而在京善正寺殿今拙寺江別紙ニ而承候得者、上村願楽寺殿御聞札之趣ニ相見へ申候、同寺儀兼而風聞不宜敷候ニ付自然一味之御弘通

二 差障候哉と奉存候間、

御殿江行成書差上申度内談も仕候得共、近年ハ絶而川本組辺へハ唱導ニ招待申法中も無之故、願楽寺殿之底意聡与聞定急度取上ケ候程之事ハ無御座候得者 御殿江直ニ言上ハ及不仕候間、幸此度御上京之貴寺迄拙寺共悲歎之趣申上候間、御役所御席之節者宜敷御伝へ可被下候、尤も願楽寺殿儀何事も無之帰国ニ相成候ハ、却而已前之弊風も増上長仕候と歎ケ敷奉存候、依而右歎之底意為実証拙寺共連印ヲ以御頼申上候、以上

川本村

午七月十六日 法隆寺印

同村

光永寺印

川下村

正安寺印

大家本郷

明円寺殿

一 筆啓上致候、残暑未難去候、何共益御教康御法務被成候由珍重奉賀候、当弟^{方カ}無別条罷居候間、乍憚御休意可被下候、然而此間之幸便ニ承候得者、貴寺江此度再御招ニ付弥近々発足上京之趣き御苦勞之御事ニ奉存候、乍恐御用之様子者此方及聞候芸州安心惑乱ニ付願楽寺殿響合等之事ニ附、於 御殿ニ御苦勞被為成趣ニ御座候得者定而^{サツ}其等之儀ニ懸り候御用と奉。(頭注)「○恐察」恐察候、貴寺も一入心配被成、何卒此度殊幸ニ当方近来流行之信機秘事とかや芸州ニ

各候間途安心向之勸談相取り 御正意一味之 御教導ニ相成候様

御殿御苦勞被成下様貴寺も御心配可被成候、此儀ニ就而ハ拙寺も

御殿江直ニ歎願も奉献度存候得共、右之勸談義も人体ニ慥ニ其勸

方聽定たる事もなく世俗同行之心得方ニ而其勸方有之と推察仕迄ニ

候得者、 御殿言上ニも其抛無之候而雖心痛致悲歎斗ニ御座候、

定而此度者 御殿之 御慈悲ニ而邪正相分立候事と奉慶察候、依

而拙寺共芸州異安心中間之様共ニ 御殿ニ而被思召候様之趣も御

座候ハ、貴寺代印ニ而不濟儀者言上可被下候、此儀ニ付而者厚頼

入申候、先者急便ニ付用事斗如此ニ御座候、早々以上

浜田領光西寺

七月十日

真空花押

銀山御料大家村

明円寺様

以手紙得貴意候、時 御安康ニ候半弥喜此事と奉存候、然者此度御
召登ニ付追々御発足之由ニ御苦勞ニ奉存候風聞仕候得者、昨冬。芸州
ニ於山縣出来候勸談一条ニ■御座候様、依而申進度儀者近来諸方見聞
候所、御当流安心ニ付異途勸候法中有之候哉、拙寺共且家之内他村之
人々令解出言ニ異途申述候者不少候得者、異解張本之僧侶有之歟、大
ニ正儀致狂惑歎専次第二御座候、自然 之共御不審ニ預り候得者、
千万迷惑仕候仕候間、拙共非其徒趣キ以御序明白言上可被下候、右段
偏ニ奉願上候、以上

涅槃寺

七月十五日

惠燈(花押)

願林寺

諦満(花押)

明円寺

覈元満満

(空白)

石州銀山御料ハ御門末多ク法義繁昌ノ地也、尔ルニ拙寺近辺ヲ見聞ス
ルニ僧俗トモニ法義両途ニ分レテオタヤカナラス、其一途ハ勸談毎ニ
専機悪ヲ責メテ曾テ安心ヲ許サス、殊ニ願力不思議ニテ往生一定ト談
スルモノヲハ或ハ機スマシ或ハ機安堵等ト急ク之ヲ破シ、唯随獄ノ機
ヲ勸ルヲ以テ務トス、其徒ハ三原村正蓮寺・井田村竜藏寺親子・福光
村瑞光寺・宅野村竜善寺・同村玉泉寺・栗原村願泉寺・新屋村了心寺
等也、是ニ婦スル処ノ俗徒常ニ随獄ノ深クシラレサルヲ悲ミテ願力ノ
信受ナラサルコトヲ悔ヒス、ソノ法談法話等ニ機相ノ悪キコトヲ云中、
悲泣雨涙シテ称名ス、法尊高ヲ談スルトキハ萍平トシテ聞サルカ如シ、
即檀下ノ内ニソノ徒両三人又村内同行ニソノ類アルヲ以懃懃ニ之ヲ論
スト云ヘトモ、執去難キニ似タリ、可哀々々、此一途大ニ蔓リテ料内
七八分ニ及ヘリト聞伝、其一途ハ別ニ機ヲ責ス、偏ニ法ノミヲ談セス
専ラ五帖ノ消息改悔文ノ則ヲ守テ勸レトモ帰スル処ノ輩ハ却テ稀也、
之ニ依テ立敵論ノコトナシト云ヘトモ、自ラ隔意ス、于時去安政丁巳
ノ秋隣国芸州山県郡ニ於テ法論大ニ起リ殿使称名寺札明ノ処、新義ノ
一説其源石州浜田領田所村真清寺弟子円徹(自ラ簡古堂ト称シ)当時
邑智郡中野村居住及銀山料上村願樂寺ニ出ルトキケトモ、中野村ハ領

分違ニシテ且道七八里ヲ隔カ故ニ之ヲ聞定ルコトヲ得ス、上村ハ同料ニシテ道程少カ三里ニ不足、殊ニ近郷多ク同寺ノ化境ナルコトヲ以力ヲ竭シテ之ヲ僧俗ニ密聞ス、今ソノ聞処ヲ以書記スルコト[■]左ノ如シ、

一去秋川合村善性寺ニユク、住僧ノ云、願樂寺法談名人ニシテ帰依スルモノ権者ノ如ク尊崇ス、尔ルニ美玉ニ又微瑕アルノ例歟、彼多ノ白引歌ヲ作り自ラ謳ヒ、又人ニ之ヲ授ケテ時々ニウタハシム、ソノ中意得難キ哥往々アリト云ヘトモ心ニオサルカユヘニ記得セス、^口

耳底ニ残ル其哥ニ云、思ヤ機ナケキ思ハニヤ邪見何レノ迷ノ種トナルマコトヨ^くト拙僧大ニ怪ミ十一月初旬之ヲ栢谷村香善寺ニ談ス、同寺同勸学玄雄、此哥ヲ聞キ全ク無相離念ノ安心、大ニ宗教ヲ違容ス、評判ス、有人此評破ヲ以願樂寺ニ告ルニ念シテ云、迷失ノ一機ニ投スルノ巧説、何ソ之ヲ今家ノ常談トセンヤト云々、案ニ遁辞ノ衆人ニ之ヲ伝ヘ哥ハシムルハ何ソヤ、又一時対機ノ説ハ聖者ノ所作ニシテ凡僧ノ任ニ非ルヘキ歟、

一有人云、先年浜田領千金村道場ニ至ル、一医来テ云、近来珍シキ説出来、云、一期安心ヲ許サス、唯墮獄ト思ヒ詰ルノ外心相アルコトナシ、而シテ臨終刹那ノ時必ス無間ニ墮ス、此トキミタ撰シテ往生セシム、故ニシレ、ミタハ常ニ地獄ニアリテ浄土ニ居ラスト、此説ヲ信スルモノ多シ、是非云何ト破云、如是ノ儀ハ二種深信ノ宗意ヲ昏シ衆人ヲ狂惑スルノ大邪説也ト、其後温泉津ニ於テ之願樂寺ニカタリ又大ニ破斥スルニ、願樂寺黙々[○](頭注)「○然歟」トシテ是非邪正ノ際ヲ弁セサレハ之ヲ又余人ニ告、則チ手ヲ打テ云、願樂寺何ソ之ヲ評スルコトヲセン、ソノ義源ト願樂寺ニ出ルト、ソノ銚国分村金藏寺・千田村浄光寺等ニ於テ屢此説ヲキク、今時銀浜両領ノ道

俗之ヲ帰依スルモノ十カ七八分ニ及ヘリト聞クト語ル、

一有人宅野村竜善寺老僧ニ問云、汝安心ヲ許ヤ否ヤ、答云、安心ヲ許ストキハ必ス自力ニ墮ス故ニ許サス、又問、臨末ノ機ニ於テハ云何カスルヤ、且墮獄ノ思ヒ生セシメテ往生安堵ノ心ヲ許ラスト云々、此老僧以来願樂寺へ帰依ナルカ故ニ当正月ニ請シテ教導セシム、

一栗原村願泉寺処々ニ法談スルニ一念ノ中決シテ現生不退ノ益ヲ談セス、コレ往生一定ノ安心ヲ許サ、ルカ故也ト聞ク、

一吉浦村敬願寺新發意唯恩ナル者宮廻村蓮光寺ニ於テ密話シテ云、金剛不壞ノ信心ヲ得ト云コト決シテアルコトナシ、經論祖釈ニ示シタルハ法徳ノ方ニシテ機受相ニハ非スト申シ、コトヲ、福光村瑞光寺僧瑞ヨリ伝聞ク、又唯恩ノ教導現生不退ノ益ヲ談スルモノヲ嚴ク破スルト、馬路村万行寺励恩ヨリ聞ク、曾テ唯恩イヘルコトアリ、若願樂寺ノ教導方不正ニ墮セハ我一首ヲ与ント云々、

一井田村竜藏寺隱居去秋小谷村金照寺ニ法談ス、専ラ機ヲ責テ安心ヲ許サス、之ニ帰シテ參詣シ法話ヲ請フモノ数多所以ヲ以當二月又招請スルニ、法談法話、去秋ト異シテ更ニ機相ヲ責メス又安心ヲ談セス、唯報謝ノコトヲ勸ルヲ以要トス、聴者条々相違シテ大ニ力ヲ落シ參詣去秋ヨリ半減スト云々、拙僧小谷隣郷地頭所村香光寺ニ行テ之ヲ聞、此老僧ハ願樂寺ノ甥ニシテ談体行作全ク同スト云々、

一去十二月中旬、福光村瑞光寺僧[■]瑞ナルモノ来ル、拙僧問云、願樂寺勸談、汝方意ニ於テ云何、瑞云、一座ノ談弁ニ機ノ惑ヲ拳ルヲ以テ要トシ安心ノ帰示甚微ニシテ聞得難シ、若評ヲ加ヘトキ偏ト云ツヘシ、又問、山縣ノコト源、願樂寺ニ発トキク、老僧之ヲ云何カ云ヤ、云、山縣ノ愚僧野僧彼ノ端此端ヲ聞損シテ今ノ乱ニ及ナラン、

取ニ足ラスト云々、拙僧云、聞損ハ百ニ二、千ニ三五人ノミ、聴者スヘテ聞損スヘキナシ、又希ニ一席ヲ聞クノ徒ハ義理ヲ得サルモアルヘシ、常隨^(虎)近ノ緇素一同ニ誤ルハ何ソヤ、聞損ノ遁辞、我ニ於テ之ヲ旨ス、案スルニ意許ハ凡夫ノシルコト不能トコ、ロナレトモ、言陳ニ失アルコト先ニ汝カ云処ヲ以テシル、又徹夜ノ法話何ヲ申弁スルヤ、云、初ハ只法談ト異ナルコトナシ、深夜ニ及テハ残ル^(同カ)云行少ク也テ已ニ例ノ歌ノ出シコトヲ恐レ、吾寺小ノ者ハミナ寝所ニ入カ故ニ委ク始中終ヲ知ラスト云々、

一 西田村瑞泉寺云、願樂寺ノ所談ハ坐下ノ聴衆ヲ分開自足ノ一機ト見立談ス、意許ハ失ナシト云ヘトモ教導偏ニシテ全ク御機普[■]闇ノ勸諭ニ非スト云々、

一 当二月願樂寺大家村妙音寺ニ勸談ス、一日同村明円寺ニ到云、當時ノ僧ハ本願ノ俣ヲ談スルカ故ニ益ナシト、明円寺答ルコトヲシルト云ヘトモ、所存アルカ故ニ止ムト云々、又谷村大運モ余所ニ於テ此辞ヲキクト云々、

一 拙僧ハ四年以前ニ石州ニ入寺シテソノ後京師或ハ旧里ニ^(手取カ)ヒテ在寺希ナルカ故ニ彼願樂寺ノ勸談ヲキクコトヲ得スト云ヘトモ、世評ト同行ノ出言ト同時^(マ)自作ノ哥等ヲ以案スルニ全ク不正ノ教導ナルコト必セリ、大途ニアリ、一ニハ安心、二ニハ作業、ソノ安心ハ専ラ機ヲ責テ曾テ安堵ノ思ヲサス、只墮獄ト思ツメルヲ以法味ヲ得タリトス、雖然之ハ彼カ極秘ニシテ其徒ニ非スハ之ヲ授与セス、若暴露ニ此義ヲ談スルトキハ誰カ之ヲ許サンヤ、彼カニ隱頭表裏ノ術ヲ得カ故ニ人問尋スルトキハ表ヲ以テ答ヘ頭ヲ以テ欺ク、強テ責ルトキハ聞損ニ逃ル、之ヲ以テ護法深志ノ徒モ之ヲ云何トモスルコトナシ、徒

ニ側目スルノミニ先年御召ノ節モ表ヲ以 御殿ヲ。(頭注)「○詐欺」作テソノ裏実ヲ隠ス、帰国ノ後弥盛ニ弥 弘俗徒ノ信仰前ニ倍セリト、嗚呼何ヲカ云ン、尔ニ彼ハ表裏ノ妙術ヲ得ト立トモ帰依ノ道俗未タソノ党ニ入ラサル故ニ、終ニ裏ヲ以表トシ隠ヲ[□]テ頭ニ談ス、之ヲ以彼ヲミルニ其失尤明ナルモノ也、又彼自筆ノ哥ヲ授ルニ樵夫野婦^(野)婦、經論ノ如敬フテ他人ニ対与スルヲ以テ珍トス、コレ亦彼カ邪ヲシルノ一路也、ソノ白引哥ト称スルモノ数百首云々、我三十一首ノ真筆ヲ得タリ、如別記此[■]數哥ノ中願力往生ニ安心スルト云コトヲ具ス、就中テ別シテ彼カ底意ノ果ナルモノ五六首アリ、又安心問答哥ト称スルモノアリ、ソノ真筆ノマ、ヲ聞コト、亦如別記、又山県郡井植屋ヘ送ル書中ニ云、返ス^〆モ御法義ハ機安堵^{ニカ}ヘリ易ク候間死ルト地獄ヲ忘レヌヤフナサルヘク候、忘レ^{ワス}ナヨ罪ノ深キト死ルコト、仏嫌ナ我心トヲト云々、彼是對合スルニ全ク安心異途ニシテ宗教ノ正意ヲ違犯スルコト嫌フヘキニアラス、又彼徒常ニ扱フ言ニ云、機安堵機スマシ蓮台ニ手ヲカケル信シタト思モ自力、得タト思モ自力、安堵シタト思モ自力ナリ、カハリノ手鑑等ト又彼ニ帰依スル俗輩聞法ノ中定言アリ、落ルハカリ^〆ノ私ト云ノミニテ往生一定ト難有サヨト喜フコト更ニナシヘコレニ付テハ俗輩ノ諍ニモ中ニ往生也アリトキク也^〆次ニ作業異体トハ上ニ云如、終夜ノ法話鷄鳴ヲ以テ[□]トシ且^(マ)自作ノ白引哥ニ曲節ヲ施シテ之ヲ謠ハシム、甚シキニ至テハ立テ舞モアリトキク、此哥石州三領ハ云ニ及ハス、隣国芸州雲州迄モ流行シテ稚子^(幼カ)幻女モヨク之ヲ習得ルト云ヘトモ、正義ノ僧ノ前ニハ曾テ哥ハス、已ニ聞湯湊浦辺ニハ婦女糸織ノ間農夫耕作ノトキモ巡々ニ音頭ヲ取テ高声ニ唱ト、又山野通行ノ道

連ニハ此哥ニシクモノハナシト云モアリ、又雲州ニハ是三三絃ノ曲ヲ加テ酒宴ノ興ニスルト云々、又ハ此哥ヲ以テ宗ノ極要ト授ケシ僧モアリト、去夏 御殿使専立寺ノ坐前ニ於テ津和野領主曉ト云ヘル鈍魯ノ禪門二三首ヲ謠フ、専立寺云誰人ヨリ授受スルヤト、云願楽寺ニ教ラル、ト、専立寺ノ云、無上ノ法義ヲ遊戲ニ同シテ謠フコト勿体ナキ次第ナリ、深ク冥見ヲ恐レテ已後謹ムヘシト（我隣寺ニ於テノコト也）上來記スルカ如ク、種々ノ異体ヲ結構シツ、外儀ニ如法律ノ相ヲ現シ、厚ク 本殿ヲ尊敬シ以テ苦心ニ同行ヲ勸誘シ加ルニ随徒ノ僧咲誉ヲ以スルカ故ニ帰依ノ輩日々ニ数ヲ増シ、夜々ニ来リ衆テ彼ヲ敬フモノハ蓮師ノ再来ト嘆美ス、已ニ当二月福光瑞光寺帰郷シテ云、芸州殿使称名寺帰京セシニ山県郡法義取糺シ宜シカラサルニ付役儀取上ニ相成ルウヘハ、当年再入ノ 殿使ハ□人ナルコト必セリ、又護命泰巖急召ニテ罪科ニ処セラルヘキ由シ、殿内ノ人ヨリ之ヲキク、又願楽寺義ハ著述一冊ヲ差上シニ学林勸司ノ徒ヘ下サレ名正義ノ由言上スルニツキ、召ニ及ハサル旨 仰渡サルト云ヘトモ、一ハ後生大事、一ハ衆人趣慮ヲ敬セン為□ニ少モ勞スルコトナシト云ニ、大家村浄土寺ニ於テ西田瑞泉寺ヨリ親ク聞ク也、又拙僧出国前ニ珍キ風説ヲナシテ世人ヲ驚テ云、願楽寺去冬著述ノ教導意得書恐多モ

大法主一覽遊ハサセラレ感歎ノ余リ同寺ノ法話ニ預カタクト仰ラレ（下脱カ）襃宝トシテ開山形絵像領アリト云モアリ、或ハ内陣拜官也トモアリ、愚俗之ヲ信スルモノ多ク僧分モ亦之ヲ潤色シテ荒涼ニ沙汰深志ノ徒朝暮大ニ嘆息スルト云ヘトモ時勢云何トモシ難シ、痛哉々々、若今ノ如クナラハ石国ノ法義ハ表裏ニ亘テ如実ニ相承ノ実意ヲ伝フルモ

ノナク、一宗、葉永ク出離ノ正路ヲ失フコト眼前ニアリ、豈悲マサルヘケンヤ、

右者御尋ニ預リ見聞致候次第、趣意願出ヲ以而粗奉言上候、定而通シ難キ事往々可有之哉与 乍恐奉存候得者、毎調候上ニ而言上仕度奉存候、此上者格別之以御憐 ヲ 石国之御法儀一和致 御相承之御宗意御弘通ニ相成候様偏奉希上候、以上

石州邑智郡銀山御料

安政五年

祖式村

戊午之夏六月

善正寺

護賢花押

御本山

御用僧様

自国内村願楽寺此度御不審掛リ、御聞糺ノ為拙寺従来同寺手元見聞次第具ニ申上ヘク様仰付ラレ候ニ付、左ニ書取ヲ以テ奉言上候、

一、国内流行異途安心向之事

二、願楽寺教導心得方直話之事

三、願楽寺末徒僧俗見聞之事

四、積年悔歎正義同志寺院之事

一国内流行ノ異途安心勸談ノ趣ハ本ト機法ニ種深信ノ判釈門ヲ以直ニ機受ヲ談示シテ云々、一二信機トハ我身ハ罪惡深重地獄必定ノ機ナルコトヲ決定深信シテ浅カラス、能ク了智スヘシ、此方深く信セラレハ其機ヲ墮ンノ弥陀ノ本願力信セラル、ソコカ信法也、此ヲ

二種深信ト次第シテ分玉フ、是レ一宗安心ノ規則也、尔ルニ世人誤テ初ヨリ本願力一ツニテ助ルト斗リ信シテ初ノ信機ヲ不知故ニ遇法ヲ聞ト云ヘトモ本ト不具ノ聞信故ニ不如実也、初二我身ノ墮獄必定ナルヲ能ク決了セシテハ御慈悲ハ信セラレヌト云也、是レ唯二種深信積ノ文ニ局執シテ其ノ積意ヲ不知、且ツ本願力ヲ信受スル一念ヲ以テ宗ノ安心ノ御定教アルコトヲ不知、唯法談僧ノ弁義也ト云ヘトモ、在俗ニ対シテ御宗意ヲ破シテ此ヲ立テ礎ヲナス也、又信機信法他力ナル者ヲ語テ云、我カ機ヲ地獄者也ト信知スルハ全ク私ノ力ニアラス、正ク善知識ノ教示ノ力ニ依テ初テ墮獄ノ身ヲ知ル、是他力ノ信機也、由テ各々參詣シテ聞ネハ我機ヲ信スルコトナラスト云々、信法ハ勿論如来ノ本願召喚回向法ニ依テ其本願撰取ヲ信スル故、他力信法也ト、是レ能ク他力二種深信ヲ作成セリト可笑、又往生安堵ト云コトヲ不_レ免、還テ破斥シテ云ニ、心得タト思ハ心得ヌ_レ也トアレハ、機ノ方ニ於テ得_レ心ト云コトハナシ、尔ル二人皆タノミコ、口信シコ、ロスカリコ、ロマカセコ、ロ了解コ、口聞コ、ロ安堵コ、ロ等ノモロ_ノコ、ロテ了解ヲスメテ安堵スルカ_(ス脱カ)當時ノ信者ナリ、ソレカ機スマシ心スマシト云モノヲト誠ルノミニテ機受安心ノ真実ナル分ノ沙汰絶テ聞カス、尤モ常ニ云ク、高祖大信心海ハ非有念非無念等トノ玉フト、此勸主ノ自督何ニ依テ往生安堵ト云ヤ、尋ネ聞タキ教示方也、又彼レ異類ノ經文ヲ自由ニ會合シ立義シテ云、經ニ既ニ難信之法ト説、又易往而無人ト云テ実ニ他力真実ノ信心難_レ得往生又難シ、現ニ当今ノ同行多クハ唯如来ノ願力テ助ル御慈悲テ參ルコノマ、往生タ、ノ往生ト易キコトニ思ヘトモ、ソレハ法ノ方一二日ヲ掛ケテ機ノ方ヲ不_レ知誤也、故ニ參ル

ト思テ、後生者皆地獄參リタト惶怖令メテ樂カ但自督可然歟、二願樂寺教導心得方直話トハ、同寺常云、當時ノ同行ハ願力ノ御助ト云コトハ十分聽テ聞飽テ居ル故、淨土往生ハ寢テモマクレテモスル様ニ皆思程ニ、此頃ハ參リ道ノ安心了解ヲ云タトテ何ノ易ハナヒ、又心ヲ止テ聞モセス、由テ其行キスキタルヲ後返リ令ルカ此頃ノ教道ノ勤タ、其ノ後トカヘリ令ルニハ參ラレス、機ノ方ヲ談テ聞カスレハ少ハ眼ヲ醒シテ聞ク、ソコテ世間ニ願樂寺ノハ法談テハ無ヒ、機談タト人カ云カ法ノ利益ヲ談シテモ聞ナレハコソ心ヲ止テ聞ネハ易ハナヒ、ソレヨリハ己レカ機サマヲ知ラシテヤレハ驚テ法ヲ尋述ル様ニナルト云カ願樂寺教導心得方也、此事ハ常ノ話也、拙彼願樂寺二初テ面會スルハ十七年已前二月同寺ヘ別用アリテ尋行ニ、折節福光村瑞光寺ニテ法談座導師也、追尋テ一宿シ対面ス、其夜願樂寺瑞光寺当住ニ對話シテ云、〈拙次座列〉當時ハ安心ヲ談シ淨土參ハ道ヲ云テ聞セテハ還テ邪見懈怠ニ墮スル、尔トモ多方カソレハ知ラヒテ願力テ助ル御慈悲テ參ト往生ノ道ヲ明テ回ル節格、此方等カ參ル道ヲ閉テ驚カ令ト骨ヲ折テ回レハ道ヲ開テハ通シ明テハ通シスル、先コノ東方テハ満行寺照顯公カ豊後カラ帰テ法談シテ回ルソフタ、是カ又明テ參ラスルテアロウ、瑞光住云、左様テ御座リマス、此モ又參ラセ方テ御座リマス、願樂云、困タモノタ、又満行寺院家カ法談シテ回ルソフタカ是カ又知レテアル參ルコト斗リ云チャ、彼衆ハイラサルコトヲ云テ回ロウヨリハ學問メサレハ門徒ハソレヲ喜フ、ソレカ身為學問ナシニ法談シタトテ邪魔ニハナリテモ益ニハ立ヌト云々、又願樂寺云、惣体此頃世俗人機ヲ思ニ男女ノ中男ハ相手ニナラス、男ト云モノハ女ヨリハ猿知恵カアルテ最早一度參ルコト

ヲ聞込テカラハ悪ル腰シ堅メテ何ト云テ聞セテモ御慈悲テ參ルト踞
テ不動、何ト云テモ女ト云モノハ正直ナテ參ラレヌト云ヘハウロタ
ヘマハリテ手ニ附テ回ルヲ終ニハ法ニモ入コトアリ、故ニ私シラハ
女ヲ相手ニスル積リタト云云、コレ初対面ノ珍説ナリト聞テ今ニ
難^レ忘、又其後十四年已前跡市村蓮教寺ニテ願樂寺ニ面会シテ三四
日互ニ法談ス、彼人ノ談意今ニ聞記スト云ヘトモ機受安心ノ教示ナ
シ、互ニ雜話中願樂寺云、當時ハ安心ヲ談示シテモ心ヲ止テソレヲ
聽者ハナヒ、ソレハ聞飽テ居ル故ニ骨折損云云ス、其頃世人互ニ云、
願樂寺ノ地獄安心、^{願元}（拙柄藉名）ノ一法安心[■]テ世俗相争フ
コトアリテ、^{願元}ノ一法安心、跡市蓮教寺ニテ閉口スルト数人評ス
ルヲ聞ク、由テ不^レ忍シテ予防邪深信喚ト云破邪顯正書ヲ述シテ天
河内村滿行寺ニ於テ願樂寺ニ面会スルトキ、自ラ之ヲ渡シテ云、若
御正意ヲ害スル処モアラハ加筆給ヘト其書中ニ凡夫此假御助ト信ス
ル外ナキ易往易行本願一宗ノ大道ヲ閉塞シテ墮獄凡夫撰取ノ大悲ヲ
無ニシテ唯三途ノ道ヲ有令テ此ニ引入スルノ邪教ヲ以テス、実ニ阿
鼻ノ罪人トハ正ク汝等カ事也、又コノマ、ナカラノ御助ケト教ルト
キハ如実ニ至ル信者希ナル故ニ當時ハ此勸ヲ立ル扨トテ、己レカ屋
ニ入道路門戸ヲ自由ニ轉遣スル如ク、仏祖相承ノ師教ヲ捨テ己レ自
ラ立教スル大不如実者ト指シタルハ正シク願樂寺ニ的中令テ書ヲ示
ス、而シテ其後右ノ書ノ一^{（寛方）}□ノ意ヲ尋ニ、同寺云、右様墮獄ノ機ヲ
信スルヲ安心ノヤウニ勸ルモノ、今家祖門ノ徒ニハアルヘカラス、
愚俗同行ノ聞損取ニ不^レ足ト云云、又其比願樂寺三四輩斗リ所化ヲ
連テ有ル寺ニ法談ニ行コトアリ、有日談上云、各々同行法ノ御助ケ
斗リ聞テコノマ、參ル^レトミナ心得レトモ、左様ナコトテハ真実

御慈悲ハ知レヌ、何者祖師ノ御言ニ信機ヲ不知故ニ如来広大ノ恩德
ヲ迷失ストノ玉フ、各信機ヲ不知シテ如来ノ恩德ヲ得ルト云コトハ
祖判ニ異スルト手広ク談ス、後チニ所化僧ノ中ヨリ同寺ニ問、信機
ヲ不知故如来広大恩ヲ迷失ストハ何ノ御言ニ候ヤト、願樂寺云、真
仏土等ノ終ヲ不^レ見ヤト、所化云、彼ハ真仮ヲ不知故ト御座リマス、
願樂云、マテ^レコレハマコトソフタ、尔レトモ信機ヲ知ラス故ニ
如来広大ノ恩德ヲ迷失スルトハドコソノ御言ニナケレハナラヌ筈チ
ヤト勘考セラレタト云話、諸人能ク知り話スコトナリ、又願樂寺当
春二月初頃、拙ノ隣寺ヘ法談有日夕方拙寺ヘ来リ、芸州山県郡安心
惑乱ノ話シ致サル、相応ノ返答ニテ聞トキ、願樂寺云、惣体彼方ハ
御慈悲本願ノ俣斗リヲ云処也、併シ本願ノ俣ヲ人皆聞得レハヨケレ
トモ當時ハ左様ハユカヌト、跡ニ言ヲ殘シテ隣寺ヨリ来^レ迎^レル
ニ乗シテ立帰リタリ、彼言端ヲ推ハ定テ彼ノ方ニテ本願ノ俣ヲ不^レ
談、仏願ニ背テ異途ヲ談シタリト見ユ、是レ思ニ願樂寺自督ニ就テ
ハ異ハナカルヘクトモ、教導ノ上ニ附テハ異途安心ヲ以スルノ立儀
也、此度 御糺ノ上ニ於テハ自督ヲ以教導ス、異途ヲ以テハセスト
言上モアルヘク候ヘトモ、自国ニ於テ時々ノ直話直説如上來若欺テ
自国毎事ノ話トハ是全ク外敵ノ虚言也ト逃フモ難斗候トモ、然シ彼
ニ自カラ其証扱アリ、彼定テ此度御殿ヘ差出ス教導意得書ト名テ当
春著述ス書、其比拙火急ニ内密一見ス、彼書七八分目比ニ當時ノ人
機教化スルニ甚タ難クシテ如実ニ至ラシムル教示ノ苦シキコトヲ書
キ頭セリ、彼苦ム底意ヨリ異説ヲ咄ト正ク文端ニ見ヘタリ、是此願
樂寺自督心底ヨリ法ヲ誤テ異途ヲ伝ルハ無宿善トモ可哀、若シ自督
ニ於テハ他力安心ノ極致ハ了得シナカラ自己ノ意ニアラサル忘説^{（マ）}ヲ

咄テ諸人ヲ迷惑令メ、剩ヘ 御正意ノ安心向ヲ破シテコノマ、御助ケ御慈悲テ參ル杯云コトハナキコト、御文章ノ御言ニハ別ニ口伝カアルト、自ラ悞(頭注)「誤ナルヘシ歟」リト知テ此説ヲ咄テ御常教ヲ捨ル杯トハ尤モ可_レ惡罪人也、自カラ誤テ他ヲ誤令ルハ由來類例(頭注)「顛到歟」多罪人也、自ラ不誤シテ他ヲノミ誤令ルトハソラクハ今タキカス、ムルイ罪人也ト忿度コトニ候、愚慮セリ、三ニ願樂寺勸談流ヲ聞及テ其微ヲ習学僧侶其数多シ、石州場ニ依レトモ先ツ銀浜兩領ハ法儀相応ニ繁昌ノ地也、其中知ル人モ知ラヌ人モ願樂寺ト云ヘハ同行ミナ尊崇ス、依テ法談ヲ職トスル様ノ野僧モ類多アル中、願樂寺流ノ法談ヲスレハ參詣_■多、本願力ノ法義ヲ談シテ他力往生ノ宗義ヲ述ル方ヘハ彼等ノ徒ハ參詣セス、還テ嘲テ_〔カ_〕ス、由テ願樂寺流ヲ用ハ勝テヨロシキ故、法談僧多ハ彼徒類也、其寺別ヲ拳ハ福光瑞光寺・宅野玉專寺_(坂カ)・同所竜善寺・栗原願泉寺・三原市山兩住正蓮寺・井田村竜藏寺・黒松法正寺、又浜田領ニテハ田所村真清寺弟子徹円(自称簡居堂、此者実ニ渡世法談ニテ右ノ教示甚シ)跡市村西樂寺・同寺弟子僧輒(此者願樂真説也)此也、市山正蓮寺門徒後山淨光寺住觀徹・三宅村專称寺等也、右拙寺見聞スル処也、又願樂寺ニ婦依スル俗輩ノ事、是皆不正ノ者ト云ハアラス、此ニ偏執婦依ノ徒アリ、又引立ノ慇懃ナルニ依ル信者アリ、先其偏執婦依ノ徒ハ他人ノ法談ヲ不聞、一途ニ願樂寺ノ説ヲ守テ道路ノ遠近ヲ不_レ論、家業ヲモ捨テ願樂ノ法談ト聞テハ会中詰込滞留中ニハ願樂寺ヘ三季ノ勤不欠ナルモアルト聞ク、則チ浜田領ニ和木村トテ人家二百軒前後アリ、年中ニ一兩度在家己カ家ヘ願樂寺ヲ招待シテ七日十日聽聞ス、此村ニ他僧然ルコトヲ曾テ未聞、願樂寺其処ニ行後二話ア

リ、願樂寺様御出テ和木村安心破レカ又出来タ_〳云、何様ニ破レルソト問ヘハ、ミナ午前了解テ有タケヲ破ラレタケナト他人話每ニ聞_レ之也、願樂ニ常ニ同行ヘノ相拶_(ツ)ニ貴殿久々振タカ了解カ濟テ法義ハ寢入テ寺參センノテアロウト、由テ世人云、目醒ノ願樂寺ト、信者同行モ目醒ノ願樂寺ニ引立ラル、ニ依テ尊崇婦仰スル也、其信者ノ同行ニ対シテハ正義安心ヲ語り合シテ相続令ルト見ヘタリ、由テ拙寺知音ノ信者モ願樂ニ婦依スルモノ数アリ、拙其者ニ云、其方共ニハ願樂寺地獄必定ノ信機ハ勸メサルヤト云ヘハ、答、御慈悲ヲ聞テ機ノ方斗ヲ見レハ願樂寺様ノ仰ノ通り間違ハ御座ラス、尔ルニ墮_レン御慈悲カ有テ被下ト喜フ、又拙云其方等ハソレテ善シカロウカ、証人願樂説ヲ聞テハ誤ルテアルト云ヘハ、答、其者モ御座ロフカ懈怠勝ナ私等カ驚カサル間願樂寺様ノ仰ハ御心切テ御座ルト喜フ者_〔四_〕積年_〔積年_〕アリ、四ニ積年悔歎正義同志ノ寺院トハ其僧侶寺院モ多カルヘシト云ヘトモ願樂寺教示ヲ破セハ其者即異安心ノ様ニ人思ヘリ、由テ不学ノ僧ハ勿論有力大寺ノ住持タリトモ人機ヲ勘テ破斥ヲ用捨ス、既ニ浜田真光寺・光西寺十余ヶ寺前ヨリ兩寺談合シテ願樂ヲ決テ法談_レ頼コトヲ治定ス、願樂色々同行ニ手回シテ兩寺ヘ出談セントス、尔ルニ光西寺先住近辺世話門徒類ニ願樂ヲ招スルコトヲ勸レトモ不承知被申ニ就一旦不和トナルコトモアリ、已ニ此度 御召登ノ祖式善正寺モ出国後南方ニテハ世俗種々ニ惡評ス、自坊老僧聞ニ不_レ忍ト悔候、拙寺_〔出_〕立_〔前_〕世人惡評云、法仲僮シテ願樂_■ヲ惡評ニ登ルト、由テ同志法仲口外ニ願樂破斥スルコト不_レ能、心中独り悲歎スルノミ、其等ノ同志法仲拙寺此度上京ノ趣意推察シテヤ、福田組願

林寺・同涅槃寺、又川本村光永寺・同法隆寺・川下村正安寺・浜田
城下光西寺、各拙寺へ書翰ヲ使テ云、其趣意ハ此度ノ上京、若願樂
寺異安心 御札ノ一条ニ掛ル御用向共ニ候ハ、流行ノ異安心此度
ヲ限りニ根本ヲ御断絶成シ被下候様 御慈悲ノ 御殿御役掛リエ序
ヲ以宜ク言上致賈度旨頼來候、其來状所持致居候、又朽谷村香善寺
ハ拙出立前直參シテ歎願書認差上候分、則別紙ノ通りニ候、是レ至
極ノ貧寺難洩ノ砌ニ候ヘハ、上京ハ得不仕候トモ悲歎ノ切ナル余リ
ヨリ乍恐歎願差上候トノコトニ候、是レ同志各希処ハ願樂若此度不
事ニテ下來リ候ヘハ異途ハ已前ニ増テ強盛スル間、此段
御殿へ其慈察ニ頼上申趣ニ候ナリ、

右四条ヲ以乍恐奉言上候、何卒 御殿御慈悲之以 御威光、異途
流行相収 御正意御弘通一味ニ被 御成下候ハ、御門末一統慶悅■
■無此上難有仕合奉存候、

御殿向宜敷 御取成之段奉願上候、

石州(近方)近摩郡大家本郷

安政五年

明円寺

午八月日

覈元花押

御本山

御用僧様

(以下(二)へ続く)